

集学的治療により CR が得られた中咽頭癌の 1 例

社会医療法人共愛会 戸畑共立病院

臨床工学科 溝口勢悟、大田真、樋口優子、嶋田愛、灘吉進也

がん治療センター 成定宏之、鞆田義士、森岡丈明、中原惣太、今田肇

症例は 60 歳代男性。2016 年 4 月、中咽頭癌頸部リンパ節転移と診断。同県の複数の施設を受診するも治療不能と診断され、近医にて経口抗癌剤（UFT）併用し、温熱療法を 4 回施行。同年 5 月、当院での治療を希望され、温熱化学放射線療法・高気圧酸素治療（HBOT）を開始。温熱療法は頸部リンパ節へ $\Phi 14/14\text{cm}$ を用い、 $446\pm 45.6\text{W}$ で 38 回施行。化学療法は、放射線併用時に CDDP を 3 コース、その後、PAC/Cmab を 8 コース施行。放射線は 70Gy 照射。HBOT は 64 回施行。シフラは治療開始時の 19ng/ml から 3.1ng/ml と減少し、原発巣、転移巣共に消失し現在に至る

本症例は放射線療法の選択も考慮されず、経口抗癌剤を併用した温熱療法を行うも効果が得られなかった。しかし、当院で温熱療法に化学療法と放射線療法、HBOT を加えた集学的治療を施行し、劇的に奏効したことは、今後同様の難治性頭頸部腫瘍に対し有効な治療になり得ると考えられた。また、温熱療法では、当院で行った同症例（ $n=45$ ）の平均出力 $308\pm 100\text{W}$ に対し、 $446\pm 45.6\text{W}$ と僅かに高い傾向にあった。その要因として、症例は下顎部と頸部との凹凸が少ない環境下での加温が可能であったことが推察された。